

木下長嘯子伝雑考 その（二）

津田，修造
鹿児島県立鶴丸高校教諭

<https://doi.org/10.15017/12065>

出版情報：語文研究. 50, pp.31-42, 1980-12-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

木下長嘯子伝雑考 その二

津 田 修 造

(一) 「恋の歌尽」について

「恋の歌尽し」(二冊)は、吉田幸一氏の御説明(長嘯子全集 古典文庫)に拠ると、刊本に編撰者の記名が無く、板行は寛永年中ということである。この作品を長嘯の作とする書を列挙すれば、次の通りである。

(一) 寛文十年書籍目録

- 一冊 虫歌合 八冊 挙白集 長嘯
 - 二冊 恋哥尽 一冊 同難
 - 三冊 同新撰 一冊 同難々
 - 三冊 同長嘯 一冊 うなひ松 長嘯
- 寛文十年は、長嘯没後(慶安二年)わずか二十一年目にあたる。二冊本の他に、三冊本が出されたらしく、長嘯が撰んだことがわかる。

(二) 辨疑書目録

- 宝永七年(一七二〇)六月刊
- 木下長嘯書作 號天哉
- 虫乃哥合 一冊 うなひ松一冊 戀乃哥盡ツクシ 二卷 挙白集

十卷

此ノ書ハ長嘯一代ノ筆跡ヲ記ス。門人山本春正ノ集ムルナリ、此ノ外ニ歌ノ集アリ。此ハ統愷窩文集ニ見ヘタリ。挙白集出テ難挙白集ト云モノ三冊出シテ長嘯ノ歌并和語ト難ジケレバ其後又何ンヤラン難々挙白集ト云モノ一冊ヲ著シテ批評セリ。共ニ板本アリ。

(三) 書籍目録作者寄

- 五卷 安永・天明期(一七七一―一七八九)写本
- 木下長嘯 号 天哉

虫の哥合一卷 うなひ松一卷

戀の哥尽二卷 挙白集 十卷

(四) 近代著述目録

- 文化九年(一八二二)刊
- 木下長嘯子 名 勝俊 一号 天哉翁

四生うた合一 うなひ松一 恋の哥合一 挙白集(已上四部門人山本春正輯) 十

(五) 典籍作者便覧

文化九年(一八二二)序 写本

木下長嘯 姓ハ豊臣名ハ勝俊天哉翁ト号ス通レテ東山ニカクル御作

虫之哥合一 恋之歌合一

挙白集 八

うなひ松は挙白集文章ノ内也

(一)は「長嘯子全集」第一巻凡例より引用させて頂いた。(二)～(五)は「近世著述目録集成」(勉誠社・S53・12)に拠った。

この作品の内容を検討した結果、八四九首全てが「風雅集」以下五つの勅撰集より選んだ歌であることがわかった。以下、詳しく述べ

べる。

まず撰歌数を表にすると、次のようになる。

表 I

歌集名	項目	
	各歌集の恋歌総数	恋歌尽上巻撰歌数(四三三首)
新統古今集	553首	126首
新後拾遺集	339首	42首
新拾遺集	461首	73首
新千載集	631首	94首
風雅集	450首	98首
		A
		B
		恋歌尽下巻撰歌数(四一六首)
		A
		B
		(計八四九首)
		A
		B

A 「恋歌尽」の歌数に対する割合を示す

B 各勅撰集の「恋歌」数に対する割合を示す

表 II
表 I から撰歌数の多い順に並べてみる。

項目	頻度	
	上巻	下巻
全体	新統古今集	新統古今集
	新千載集	新拾遺集
	新拾遺集	新千載集
	風雅集	新後拾遺集
	新後拾遺集	風雅集

全体として撰歌数が最も多いのは、「新統古今集」で、「恋歌尽」総歌数の三割にあたる。また「新統古今集」の恋歌の約半分を引いており、この歌集を主体にした歌の撰び方をしていることが知られる。これに対し、最も少ないのは「新後拾遺集」であり、撰歌のあり方がそれだけ断続的であることを示す。この事は、五首以上にわたって歌が採られていない箇所を拾ってみると更にはっきりする。

表Ⅲ

計	勅撰集		新統古今集
	上巻	下巻	
12	7	5	風雅集
13	3	10	新千載集
11	3	8	新拾遺集
14	6	8	新後拾遺集
4	3	1	新統古今集

数の上では「新統古今集」を除き、ほとんど差が無いように見えるが、「新後拾遺集」は全集歌番号三二九〜三八五（三十七首）にかけて大きな空白があるのを初めとして、他の歌集に比べ大きな空白が目立つ。また、上下巻を比較した場合、「風雅集」が下巻で半減した分だけ「新拾遺集」「新後拾遺集」が増えている。

次に一つの題詞に対し、複数の勅撰集から歌が採られる場合、どういう順序で歌を撰んでいるかを見てみる。合わせて、一つの題詞に対し一首の歌しかない場合、どの歌集から採っているのかも示す。

表Ⅳ（勅撰集撰歌順位）

項目	勅撰集		順位
	上巻	下巻	
風雅集	22	17	1
			2
			3
			4
			5
新千載集	11	18	1
			2
			3
			4
			5
新拾遺集	6	9	1
	10	15	2
	11	9	3
			4
			5
新後拾遺集	2	4	1
	1	11	2
	6	6	3
	7	1	4
			5
新統古今集	1	10	1
	3	13	2
	3	3	3
	7	9	4
			5

表Ⅴ（一つの題詞に対し一首のみの場合）

計	勅撰集		歌集
	上巻	下巻	
24	16	8	風雅集
22	14	8	新千載集
20	11	9	新拾遺集
9	5	4	新後拾遺集
59	37	22	新統古今集

(一) 表Ⅳに関しては、「新統古今集」の第二番目に採られる例が最も多いが、これらは全て、一つの題詞に対して撰歌が二つの勅撰集に限られた場合である。また下巻は「風雅集」が減少した分だけ、順位がそれぞれ一つずつ上がっている。以上の事から、一つの題詞に対して勅撰集からの撰歌は、「風雅集」「新千載集」「新拾遺集」「新後拾遺集」「新統古今集」の順であったことがわかる。

(二) 表Ⅴについては、上巻に比べ、下巻は一つの勅撰集に片寄る数

がやゝ減少したとは言え、全体として見れば、やはり「新統古今集」が圧倒的に多い。

「恋の歌尽し」全歌を細かく見れば、歌の書き誤りが多い。また題詞も誤りがあり、例えば次の通りである。

六一八	寄露恋	寄雨恋	五二六	涙尽欲腸絶恋	後朝隠恋	五二九	後朝絶恋	四八二	互恨恋	四六九	恨恋	三三四・三三五	顕悔恋	恋歌尽題詞	各集題詞
五八四	寄風恋	寄帆恋	五三三	人をおもふ恋	六帖の題にこと人を思ふといふ事を	五三七	絶不知恋	五二二	絶不逢恋	四六九	怨恋	三三四・三三五	顕恋	恋歌尽題詞	各集題詞
五五七・五五八	寄月恋	寄月恨恋	五三三	人をおもふ恋	六帖の題にこと人を思ふといふ事を	五二九	後朝絶恋	四八二	互恨恋	四六九	恨恋	三三四・三三五	顕悔恋	恋歌尽題詞	各集題詞

「恋の歌尽し」が如何なる過程を経て成立したものであるのか。題詞の撰び方・目的など今後解明されなければならない問題も多い。これらの問題に対し、直ちに答えることはできないが、次の事は言えよう。

(一) 「恋の歌尽し」は各題詞毎に歌を集めた下書きが予め有って、それを基に編まれた作品であろう。但し、歌数が多いために、例えば五三番(全集歌)のように、この前後が「新統古今集」の配列通りになっていない、そうした箇所も全体としては若干見受けられる。

(二) 取り上げた歌人については、別段配慮がなされたようには見えない。題詞の撰び方は一応各勅撰集の恋歌の配列に倣ってはいいるが「恋の歌尽し」が撰ばれた目的と何らかの関りを持つことになる。

次に「孝白集」の恋歌の題詞がどの程度「恋の歌尽し」と重なるかを調べてみた。

表VI 「恋歌尽」の題詞(二五二題)との重なり

項目	歌集	
	歌人名	恋歌総数
孝白集	長嘯	84首
三恋歌	幽斎	83首
衆妙集恋歌	貞徳	341首
道遊集		67
卷五恋歌		26.6%
		15.9%
		13.5%

各歌集の恋歌数が異なるので比較が難しいが、結局、三歌人とも「恋の歌尽し」の撰者たり得ると言えよう。このことは、長嘯が

表面上は伝統的な歌風の延長線上にあることを示している訳であるが、他方、意識的に新しい歌への試みがなされようとしている。

長嘯が門生の歌学入門書として書いたのではないかとされる吉田幸一氏「和歌手綱」(宮内庁書)の中に「初五文字に詠すべからざる詞」という一項がある。

一、初五文字に詠すべからざる詞

ほのくと 枚ちる 大方は 月やあらぬ

名歌の五文字なれば可憐。(以下略)

挙白集には、右の制詞中の二つが使われている。(括弧内は全集番号である)

ほのほのとうちの山本かすむなり都のたつみ春やきぬらん(三八八番)

大かたはうとの小嶋の名つらしうとくて人にあらんとおもへば(挙文一〇八番)

後者は元和九年の「道円鏡別」中の歌である。

今後、長嘯子が如何なる目的で「恋の歌尽し」を撰んだかが判明する時があるが、単に題詠歌を集めたというだけでなく、長嘯子自身の悲しみが込められているように思われてならない。そのことは長嘯作を疑われている「長嘯独吟」についても言えるように思う。

(二) 長嘯子の母をめぐる

「挙白集」第九は主として弔文を集めた巻である。後陽成院・父・女旨法印・妙寿院・祖母・実子三人・稲葉丹後守・道円妻・林叔勝・玄東母の死に際しての文章である。長嘯は母の弔文は書いていないが、「挙白集」巻第五に母の死に触れた一首がある。

母のおもひにておはしける比とはざりける人のもとへ

問かしの泪ばかりをつゝみもて今はよそなる袖のたち花(一七〇〇番)

「長嘯子集」(輪池叢書本)は多少異なる。

母のなく成ける比とはざりければいとくが許につかはしける

とへかしなともにつゝみしうれしきよ今はよそなる袖の立ばな(二〇三四番)

「寛政重修諸家譜」(豊臣氏)の「勝俊」の系図に記された「母は某氏」というのが、右の一首中の人物ということになる。但、「挙白集」にその弔文が無いことが疑問の残るところであろう。

勝俊の母については、古来、武田元明室京極龍子(のちに秀吉の側室と称)とする説(続群書類従所収の若州武田系図)がある。嘗て、宇佐美喜三八氏が「木下長嘯子の生涯」(和歌史に關)の中でその説を浮説とされて以来、勝俊については、今日、木下家定嫡男説が定説となっている。浮説とされる以上、氏はそれなりの理由を挙げておられるのだが、それは別に松丸殿実子説を直ちに浮説と断言し難い問題があるように思われるので、以下述べてみたい。

(一) 長嘯子を京極龍子の子とする説は、既に、長嘯没後九年目の万治元年八月に一般向けに出版された「洛陽名所集」(巻之四)の中に見える。

○ 霊山りやうぜん

近頃若狭京極少将入道長嘯此處にすみたまひしなり。長嘯ことさらに歌道にふけり。世人の口碑にのこるうたおほかめり。すなはちきよはし挙白集とて十卷有。

長嘯子生前より、その実母を京極龍子とする説が有ったことを意味し、後世の誤説とする考えは当たらない。長嘯を知る人々も未だ生きていた時代であり、更に興味を惹くのは、この作者山本泰順が長嘯と最も親しかった冷泉為景の弟子であったという事実である。

ここに「豊臣秀吉公葬儀御行列一覽」(綾部市立図書館蔵)なる一卷

がある。慶長三年八月十八日豊臣秀吉が六十三歳で薨去した際の御葬送御行列で、綾部藩士山口正治が嘉永二年禁裡誓固の為に京都二条城にありし時、城内にあった資料から写し取ったものである。約二万五千人が加わっているが、主な人物を書き抜いてみよう。
(括弧内は供の数を示す)

伊達奥陸守政宗(五百人)・京極若狭守(三百人)・徳川内大臣家康卿(五百人)・小堀遠江守政一・金吾中納言秀秋卿・細川越中守忠興(二百人)・木下宮内少輔(百人)・木下美濃守(百人)・政所殿

(百人)・淀殿(百人)・連歌師紹巴・由己・昌叱

右の行列中に豊臣一族である木下勝俊の名は見えないが、慶長三年若狭守であったのは勝俊であり、その期間も文禄二年から慶長五年に及ぶ。従って「京極若狭守」は木下勝俊を指すと考えられよう。何故に京極姓を名乗っているのか。木下家定実子説の立場からは説明がつかないのである。

(二) 貞享元年(一六八四)頃に出された「雍州府志」(続々群書類従所収)も、長嘯子を松丸殿(京極龍子)の子としている。

○寿芳院月見盛久禪尼塔

在同寺豊臣秀吉公之愛妾而始在若狭国為武田元明之室産長嘯子云々

元明生害後在伏見城松丸故称松丸殿云々
長嘯子没後三十五年目に出された本で、その資料価値は高いとされている。この作品も長嘯子と親しかった堀香庵の弟子、黒川道祐の著である。

(三) 明和四年(一七六七)板屋一助によって著わされた「雅狭考」も、「雍州府志」の松丸殿実子説を継承しているが、その中の記載は注目される。

勝俊(挙白集)に後瀬山詞ありて、この外本地の地名のすることなく、のちせの詞わつかにあり。久敷在留し玉ふとはなかりしと見ゆ。後瀬山の歌、などおちふれて数ならぬ身そとあり、しかれば四位によせたる雅の歌なれば、在国して函守の時の歌なり。木下肥後守家定の子として、なと落焼と詠すへきや。実は武田元明の子といふ説(雍州府志)にあり。丹後宮津水上某氏家記にも武田元明の子二人あり、肥後守家定養ふて子とす、松の丸殿のよしみといへり。母は京極氏の女松丸殿なり。二人の子、勝俊・利房なり。勝俊は小浜、利房は高浜、ともに本国を領せさせ給ふも故有事なり。武田の先世元信従三位なり、義統の夫人は幕府の連枝、旁以て如し此事を述懐せられしなりと此種の歌にて明らかに見ゆ。(挙白集)尾巻を旧国にて感情有しは表向き成へし。(扶桑拾遺)三十巻のうち二巻あまり長嘯の文をのせらる。にて見れば、いたって和文の作者なり。惟か下とは発心寺のかたは別墅の山にありといひ伝れとも、さにあらざるへし。興を(源語)などよせられし成へし。此里に住はしめけると詞書にあるは小浜の事にて、後瀬山後住宿とは、二度閑居し給ふにはあらざるなり。慶安二年八十二歳にて果給ひしを考ふれば、天正十年其父武田元明江州貝津に死し給ふとき、勝俊十二歳と見ゆ。(挙白集)は長嘯卒し給ふのち、門人教賀の打它氏父子、諸国に尋ねて記しける集なり。書籍に宣玉ふよし。(羅山文集)にあり、東山の藻虫庵・鳴瀧の鷲月庵、皆長嘯子の為に打它氏の建たるなり。鷲月庵に印金堂とて俊成彫彫刻の人丸の像あり、(雍州府志)にも載たり。打它是、一旦京にも隠居して宗貞といへり、今に教賀子孫あり、昔は富貴なりしとそ。神宮寺にて生れ給ふは利房にやしらす。筑前中納言秀秋は、実の兄弟にあらずと知へし。(挙白集)鳥に二翅、車に両輪の詞あれども、これも表面成へし。一説伏見を退かれしを大ひにさみす、われにとりては此説しかとあたりとも思はぬなり。

細かく見れば問題もあろうが、作者が丹後宮津の打它家の家記を見ていること、及び、その中に勝俊・利房は京極龍子の実子という記載があったということが注目される。長嘯に最も接近した打它公軌の一族の家記に記されていたというだけに考えさせられるのである。拙稿「木下長嘯子伝雑考その(一)」で、長嘯の実子木下勝信の系図を示したが、その子孫たちが代々「勝・房」を諱としてきたことと右の勝俊・利房は京極龍子の実子だとすることが奇妙に一致するのである。



四 「若州武田系図」(統群書類従)

元明孫八郎 源法雲寺文甫大居士 勝俊 羽柴少将

晩年号長嘯。母松丸殿。勝俊者木下肥後守家定之子也。

松丸殿者京極長門守高吉女。而初為武田孫八郎元明之妻。

秀吉殺元明而奪之為妾。此説大謬。

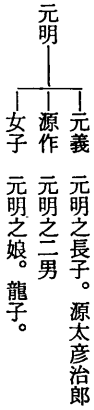
末尾の「此説大謬」は系図から「奪之為妾」まで全体を指しているように見えるが、実際は「秀吉、為妾」だけを指しているのではなからうか。そうでなければ、系図まで引用すること自体が不自然である。

京極龍子が豊臣秀吉の側室となった経緯については、「若狭郡県志」(巻三)に詳しい。

○松丸殿宅跡

在神宮寺門前、松丸殿京極長門守女而曰龍子、為武田孫八郎元明之妻也。伝言天正十年六月元明忤秀吉公之旨蟄居于神宮寺、于時妻室妊娠、故門前造屋移居于其処、而生女子則此地也、秀吉公聞元明之妻容貌勝人、而欲奪之、同年七月謀赦元明之罪招近江国員津殺之、而奪其妻室為妾、令居伏見城内松丸、故称松丸殿、卒後号寿芳院月見盛久。

武田元明の墓は、現在滋賀県高島郡海津の宝幢院にある。若狭守護武田元信の創建になる仏国寺には、武田元明が殺される前夜、天正十年七月十八日に書いた系図が残っている。「小浜市史第三巻社寺文書編」所収の仏国寺本武田家系図より一部を引用する。



一、此一巻之系図、見分之通源頼義之三男新羅三郎ヨリ拙者迄二十一代、水上共二十七代、武運長久日出度系図也。然共至拙者于代、武田家悉滅亡。武運至極、拙者至時、於此所ニ令自殺事有今日ニ。其方幼稚之源太彦治郎ヲ深相隱、成長之後、右系図相渡、武田之姓断絶無之様ニ取計可被申候。若幼稚之者、不幸ニシ而死者、武田家武運是迄ト被存、右一巻可被任其方了簡ニ候。猶熊谷平右衛門可申候。恐々謹言。

天正十年七月十八日 孫八郎源元明(花押)

△紙経目▽

表書之御系図者元明公御生害之節、拙者祖父迄被遺、武田之御姓断絶仕候者、祖父可任了簡之御書故、燒失可仕處ニ御座候得共、佛国寺者丹後若狭兩國之太守武田三位元信公之牌所タル故、相納申候。末代貴寺之可為什宝者也。

寛文二壬寅三月朔日 津田左近(花押) 法名道栄

「小浜市史」の解説に系図の筆跡と裏の貼紙のそれとが同じと報告がある。恐らく元明自筆の系図は破損したのであろう。「稚狹考」の立場に立てば、元義は勝俊、源作は利房にあたる。熊本県八代市の旧木下勝重氏宅跡には、代々、武田元義・源作・武田の姫君のものとして伝えられて来た供養塔が残っている。高台寺の長嘯の墓の左にある娘春光院の墓と同様、何も書いてはないが木下勝俊の子孫が、こういう供養塔を伝えて来た意味を考えてみる必要がある。

(四) 足利義晴(武田元明の母は義) 公所持と伝えられてきた殿中での短刀(言光作。但し無銘)が、木下勝重氏の家に代々伝わっている。吉光の作は將軍・諸大名が好んで所持したが、そのほとんどが短刀である。このことは勝俊と元明を強く結びつけることになる。

(六) 「きならし衣」で幼児に持たせてやったが、長嘯の手に戻って来たという小袖と守り袋(図版二二八頁)は、木下勝信の子孫にあたる木下勝重氏のお宅に伝わっている。その小袖には桐の丸紋が付いているのだが、実物を見ると、その他に細川桜紋と武田菱紋が描かれている。細川桜は清和源氏足利支流(沼田頼輔著「日本紋章学」)を意味し、武田菱紋は武田元明に通ずる訳である。勝俊は小袖一枚にも、意味を込めて勝信に持たせてやったということになる。

(七) 「若狭郡県志」(巻四)に菅丞相自ら彫刻した像の話が出てくる。
(天神社) 在後瀬山西麓浄土寺中、安菅三品像於社中以祭之。伝称菅丞相自所彫刻之像、而有長一寸八分矣、又別掛画像(向若録)曰、往昔越前国王朝倉義景聞有菅公自刻之像、而馳使于若狭迎靈像于越前、一拜之後返納于祠中

この菅原道真公の像だが、それと同じものと伝えられる像(座像で胸に梅紋あり)が木下家に伝わっている。

以上述べたことから、これまでの文献では松丸殿実子説を否定するものはないと言えよう。また、長嘯子生前から松丸殿の子とする考え方が一般にあり、長嘯子自身も京極姓を名乗っていた時期があったのではないかという推測を抱かせる。長嘯子末孫の伝える遺品は全て、勝俊と松丸殿とを結び付ける材料として働く。「寛政重修諸家譜」の木下利房の記載に「天正元年若狭国に生る」とあるのも、木下家定と若狭国が結び付かぬ処から、むしろ「稚狭考」の勝俊・利房は松丸殿の子とする立場に有利に働くようである。

〔三〕小壇山隠栖の時期をめぐって

「挙白集」の中に「春日の御局の餞別」(巻八)なる一文がある。長嘯子の兄弟に小早川秀秋がいる。その家老を稲葉内匠頭正成とい、その後室であったのが、後に將軍家光の乳母となる春日局(斎藤内蔵助利三の娘)である。

宇佐美喜三八氏は「木下長嘯子の生涯」(和歌史に関する研究)の中で、寛永六年十月春日局が幕府の使者として上洛し、江戸に下る際の餞別であるとされたが、「徳川実紀」を見てみるとそうではないようである。春日局の上洛は次の三回が考えられる。

(一) 寛永六年九月十二日京都で中宮方に参上。十月十日天皇拜賀。この時、春日の局の号を与えられる。

(二) 寛永九年六月に上洛し、大宮を拜してのち参内。天盃、天酌を賜わる。(天享東鑑)

(三) 寛永十七年五月二十六日上洛。九月一日江戸帰着。「春日の御局の餞別」は、寛永六年十月十日以降から寛永十一年正月二十五日(餞別の文中に出てくる春日の局の子、丹後守の没年)の間に書かれたと考えられる。しかるに、文中で「春日とよびきたれるもいぶかし。」「長月も廿日あまりになりぬ。ただあさてばかりくだりたまはむとすれば云々。」と述べているから、寛永六年の上洛の際の一文ではなく、寛永九年の上洛のものである。「天享東鑑」は雑史であるが、その記載は正しいであろう。「春日局譜略・小田原侯稲葉正則」(事実文編)にも「寛永九年之夏奉女院御所而参内」とあるからである。宇佐美氏は長嘯と局は会っていないとされたが、「たちかさねたる綾錦の云々」以下の文章、あるいは「わたくしにやすらひさぶらはるるほど」の表現から、局と長嘯は会っていると考えなければならぬ。

また、春日の局が上洛した際、東山の長嘯の山荘を訪れた話が「槐

記〔近世隨想集 岩波大系四五〇頁〕に出てくる。野村貴次氏はこの時の上洛を「寛

永十七年五月で、九月に帰府」と注を付けておられるが、これが正しいとすれば、長嘯が東山から小塩山へ移った時期を寛永十七年春とする宇佐美氏の定説も考えてみなければならなくなる。

そもそも宇佐美説の根拠はどこにあったかと言え、寛永十七年二月二十一日に紹益長老が高台寺で催した歌会の題が「花下惜友」であったことから、長嘯の送別の歌会が催されたのではないかとされる点にあった。そして次の歌から寛永十七年の春、東山を去ったとされたのである。

東山に住みうかりけん行ゑなくいで給ひし時
いける日の宿のけぶりぞ先たゆるつひのたきゞの身はのこれども
(一四八五番)

おなじころ延陀丸〔貞徳〕より「たかき名を世にのこしつづほと
とぎすふかき山路にいりにけるかな」とありしに
みやまいでて里なれぬれど時鳥きかぬは人のまたぬ成べし
(一四八六番)

「続近世畸人伝」〔伴蒿隱〕や「年波隨草集」〔陽明文庫蔵・松田修氏
木下長嘯子論〕も、宇佐美説を補うものであろう。

一、続近世畸人伝〔木下長嘯子の項〕
しかるにいかなるゆゑにかこゝをすて、西山小塩にかくれ給ふ。
其東山を出給ふに〔是寛永十七年
いづれのことかや〕
生る日の宿の烟ぞ先絶るつひの薪の身はのこれども

此うたによりておもへば、財ともしく此山荘もさゝへがたくなり
給ひしにや。

一、「年波隨草集」

○寛永十七年の条〔寺田無禪等・題洛中似七賢〕

少将何事出二靈山一見苦心汚京客訕ル
三十八年止二歌道一不勝二武勇一却呼還ル
但し、「題洛中似七賢」のすぐ後に三宅亡羊の「寛十六試毫」と題する七絶一首があり、特に松田氏の言われるように、「寛永十七年試毫」とあるわけではない。

先ず、寛永十七年に詠まれた歌を列挙する。
(1) 寛永十七年

あら玉の年の緒すけてしらふらしけふことにきく嶺の松風〔二七番〕
(2) 寛永十七年二月廿一日紹益長老〔建仁寺住持〕高台寺にて催されし会に
花下惜友

山の井のあかぬ名残や咲にほふ花の雫もそでぬらすらん〔三六五番〕
契りあらんまとるもけふのまとのかは先の世おもふ花の下陰〔三六六番〕

とふ人の出はかたみの山さくらとめすは有とも花におほせし
〔三六七番〕

(3) 寛永十七年二月廿八日見樹院立詮のもとにて題をさぐりて帰鷹
遙といふことを
ゆく鷹と心はおもひたち花やつばさにかけぬふるさとの雲〔一八二番〕

今はとてあまの戸わたる鷹のふねかすみやいくへ跡のしら波〔一八三番〕

寛永十七年二月廿八日見樹院立詮もとにて深山花
みよしのゝ山わけ衣桜色にこころのおくもふかくそめてき
〔一八七番〕

をしへをきしはたやき残す山桜しづがなさけを花にみる哉(三八番)
(4) この年、父木下家定(慶長十三年八月)の三十三回忌にあたり、
挙白集に一向三十三回のうたこと葉(慶長十六日没六十八歳)なる一文を書いている。そ
の中の歌。

めぐりあひぬふるきなみだもわかかへりいよのゆけたのかずのみ
のりに(挙文)
(二〇八番)

(5) 寛永十七年十一月廿七日見樹院にて褒貶の会に二首寄煙別恋と
いふことを

今はとて行空もなし別路に身をやく煙むすはほれつつ(二九四番)
たちわかかれけぶりの末もあふことはかたみに袖をしほがまの浦
(二九九番)

「難挙白集」に拠ると、次の二首も「寛永十七年十一月廿七日見樹
院にてもよほされける褒貶の会に、四首いだされける中のうたな
り。」とある。

月前千鳥

和歌の浦あしべのたづやゆづるらん昔の月に千鳥鳴也(二九〇五番)
有明の月もにたるを友ちどり空にかたらふ声のさやけさ(二九〇六番)

(6) 寛永十七年十二月廿二日公軌もとにて褒貶の会に契歳暮恋とい
ふことを

かつにほふ春のこなたの梅がえに心の花をなだのむらん
(二三七九番)

人心うたかたよどむおもひ川としもながれてあふせをぞ待
(二三八〇番)

「いける日の」(二四八五番)の歌については、「難挙白集」に「安楽
庵へやられし文に金子かしたうびよとありてこのうたを自筆にかき

てありしを見待し(中略)歌のうへに行ななく出るとのおもむきな
し。いかにかきかへけるぞや。もし金をかるといふき、あしくてに
や」とあるが、「長嘯子全集」第五卷所収の「桐杏庵宛書状」(三三
二頁)に、「はたまた将亦無心之事ながら黄金一両暫借如何」としてこの歌が
あり、「十二月八日」の日付になっている。書状からは窮迫した感
じは受けず、歌自体も誹諧である。「長嘯子集」(輪池叢書本)には一
四八五番の返歌として次のような歌も出ている。

こがねを、こせければかへしつかはすとて

しばしとて木火土金をかりの身は誰か一度かへさざるべき(二〇四二
番)従って、一四八五番の歌を根拠として、小塩山隱栖を経済上の不
如意とみる「続近世崎人伝」の考えは早計であろう。全集五卷(二四八
頁)には宛名未詳ながら「黄金三十借用申度候」という書状もあり、
旧大名の金銭感覚は現代人とは自ら異なるものである。

「みやまいでて」(二四八六番)の歌についても、「和歌視今集」

(第十七)には、「勝俊朝臣ひがし山にこもりしはじめのなつ郭公の
歌にそへてつかはし侍りける」という詞書が付いている。単なる誤
りではなく、内容的に「挙白集」とは全く異なるもので、この歌が
果して小塩山に移る際の歌かどうか疑問がない訳ではない。

寛永十七年の歌を並べてみた場合、小塩山に移り住んだことを感
じさせる歌はないと言える。宇佐美氏が根拠にされた「花下惜友」
の三首以外の歌(二九九四・二九九五番)にも、題詠ということはあるに
しても、これから移るといふ感じを与える歌があるように思う。

宇佐美氏も次の歌を引用されておられるが、末尾の「かくてその
としのくれをしほの山荘はもとめたまひけるとなん」に付いては何
も触れておられない。

東山にすみ給ひけるころなほ世ばなれたる所もとめまほしくおもふ
たまへけるに御心ちれいならざりければ公卿がもとへ
遠からず此のよにとげぬ柴の戸も行てむすばんしでの山ぢ□
(一六〇〇番)

御かへし

思ふとも又あらましにとしぞへむしでの山路の柴のいはりは
(一六〇一番)

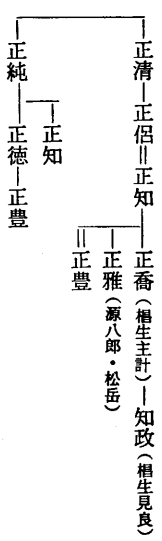
かくてその、の、く、れ、を、し、ほ、の、山、莊、は、も、と、め、た、ま、ひ、け、る、と、な、ん

長嘯は寛永十六年十二月六日付けで、円徳院(三江細益)へ宛てて
「頼入候条々」(高台寺蔵)という遺言状らしきものを書いてい
るから、仮に、「かくてそのとしのくれ」を寛永十六年の十二月と
してみる。生活環境の変化により、寛永十七年の歌には当然小塩山
を詠み込んだ歌が出てくるはずである。ところが、寛永十七年で日
時のはっきりしている歌には、小塩山へ移った様子が見受けられ
ず、むしろ、これから移るといふ感じを与える。

「槐記」の中で、「中井定覚」なる人物が十三歳の時に、春日局
の供をして東山靈山の山莊に赴いた際、長嘯は「紙子」を着て出て
くる。従って、春日局の上洛を寛永十七年と考えれば、秋頃はまだ
東山にいたということになる。周知の如く、「槐記」は近衛家熙が
語るところを、侍医山科道安が筆録したもので、享保九年(一七二四)
から同二十年にかけての記事である。家熙自身の記憶違いもあり、
それにも増して道安の書き誤りが有るとは、野村氏の指摘されるこ
ころである。

京都長香寺の中井直孝氏の御教示に拠れば、「中井定覚」とは
「中井正知」のことであると言ふ。正知(初め正朝、長三郎、大和守、主水兵
隱居後は浄覚。定覚は浄覚の誤りと思われる。)は中井正清の孫、正侶の養
子、実父は正純。寛永八年(一六二四)京都に生る。同年家督を継ぐ
(実父後見人)、承応二年禁裏造宮、明暦三年江戸城普請(この時、大和守
を改めて主水正となる) 寛文元年禁裏修造、寛文十三年禁裏修造、宝
永五年禁裏修造、宝永七年養子正豊に家督を譲り、隱居。正徳五年
四月廿六日八十五歳で死去。法名竹林院峯誉円令浄覚居士。正知は
当時の風流人士との交流が有ったという。正知の子息は病弱で、正
喬・正雅いづれも家督を継げずに隱棲せしめられる。従って、正知
は八十歳まで現役として公用を勤めた。

〔中井家系図〕 (中井直孝氏垂教)



「長香寺建立由来書写」に拠れば、大工頭中井家初代の大和守正清
は、慶長六年、五畿内・近江の大大工大縮支配を命ぜられ、また正知
が長香寺を中井家代々の菩提所と定めた(「京都市の地名」平凡社)。
正知は寛永八年生まれであるから、十三歳といえは寛永二十年に
あたる。しかし、春日局は寛永二十年九月に亡くなっているから、結
局、家熙・道安いづれかが正知の年齢を誤ったことになる。春日局
が東山に長嘯子を訪れた年を、寛永九年の上洛の際とすると、正知
はまだ二歳であるから、結局、寛永十七年の局の上洛の時というこ

とになる。正知はその時、十歳であった。再び述べるが、局の上落は寛永十七年五月二十六日。江戸帰着は九月一日である。「槐記」の記事はその間のことである。

次に歌会について触れておく。寛永十四年に公軌が鷺月庵を結び(難学白集)、その年早くも仲秋の歌会が開かれる。十五年の冬にも公軌亭で歌会があり(難学白集)、十六年正月十日には公軌のもとで長嘯は五首(二五、一九番)を詠んでいる。十七年十二月二十二日公軌のもとで褒貶の歌会。ところが十八年には公軌亭は勿論、他の歌会にも出会した記事が挙白集には出て来ない。十九年の正月公軌のもとで月次の会がある。鷺月庵が結ばれた翌年の十五年頃から、正月十日前後に月次の会を開いていたのだろう。十九年八月十五日の夜鷺月庵で歌を詠み(九四六番)、翌二十年には四月十八日景軌が公軌に代わり歌会を開いている。こう見てくると、寛永十八年だけが歌会がない。宇佐美説の如く、寛永十七年春、小塩山に移ったのであれば、十七年の歌会よりも、新しい住居に落ち着いた十八年の方がより多く出てくるべきではないだろうか。更に挙白集巻第四雑歌の中の歌を検討して見れば、春ではなくて冬に東山を去っていることがわかる。

△をほしは山にすみ給ひし比治泉為景朝臣
△おなじころ延院丸もより「とにかくに月はうき世にすまじとや山よりいでて山にいらん」といひをくれりしに
△ここも又すみこそやかね大原やあくがれいでしふるさとの山(一五七〇番)
△「炭を焼く」とあるから冬である。
①をほしは山にすみ給ひし比治泉為景朝臣のもとより
花にあけん春をとなりの大原や山桜戸は雪にとづとも(一五六二番)
かへし
尋ねみよ花はめなれぬ雪にこそあけんもまため山の桜戸(一五六七番)
△一五六〇番、一五六四番が為景の歌で、一五六五番、一五六九番が長嘯の返歌。
△をほしはすみ給ひしころ冷泉為景朝臣のもとへ

思ひやれ古巢はなれし鷺のいまだ旅なる梅がえのやど(一四五八番)
かへし
春さむみ花もほはぬ梅がえにやどりやわぶる老のうぐひす(一四六〇番)

以上述べてきたように、次の三点から長嘯の小塩山隠栖の時期を「寛永十七年十二月下旬」と推測する。

(一) 中井定寛の年齢から「槐記」における春日局の東山訪問の時期は、寛永十七年の五月から九月の間でなければならぬ。従って、この時期は長嘯はまだ東山に住んでいる。
(二) 寛永十七年に詠んだことがはっきりしている歌からは、小塩山に住んでいる様子が見受けられない。また一六〇一番の歌に歳暮に移ったと記す。

(三) 小塩山での生活にも馴れたと思われる寛永十八年には、長嘯が歌会に出会したことが見えない。また、挙白集巻四中の歌の中に、長嘯が冬に東山を去ったことを思わせるものがある。(完)

〔訂正〕「木下長嘯子伝雑考その(一)」において、次の二点は誤りでありましたので、訂正します。

(誤) 赤間神宮所蔵「懐古詩歌帳」(旧国宝)には、この時の歌五十一、句一、詩三十六が記載されており、勝俊の歌も見える(十九頁下段)

(正) 後世の奉納歌も含め歌五十一、句一、詩三十六が記載されており、この時の勝俊の歌も見える。

(2) 鳥根集 兼倉寺、鳥根集 田城寺
追記
三十一頁上段

末筆ながら、本稿をなすにあたり御教示を賜った木下勝重氏・中井直孝氏・名和修氏(五十音順)に、この場を借りて深くお礼を申し上げます。